

文学にあらわれた上野図書館

平成3年8月29日(木)～9月24日(火)

国立国会図書館の前身である帝国図書館(明治30年～昭和22年、現在の支部上野図書館)は、上野図書館の愛称で親しまれました。同館には多くの作家、文学者が訪れており、小説・随筆の中に数多く登場しています。今回は、そうした作品のなかから、帝国図書館のその当時の様子がよくわかるものを中心に展示いたします。

展示資料リスト

1. 東京の三十年

田山花袋 著

東京 博文館 1917

<363-189>

京橋の書店に奉公していた少年時代に始まり、明治から大正にかけての東京の風俗を交えつつ、当時の文壇のエピソードを綴る

2. 渋江抽齋(鷗外全集 第7巻)

森 鷗外 著

東京 鷗外全集刊行會 1923

<520-1>

医学と文学という、鷗外自身と「同じ道を歩いた人」である江戸末期の儒学者・渋江抽齋の伝記。冒頭、帝国図書館で閲覧した抽齋による写本が、その生涯を辿る糸口となってゆく

3. わか草(一葉全集 前編 日記及文範)

樋口夏子 著

東京 博文館 1912

<74-56ホ>

明治24年7月～8月、一葉が小説家として身を立てることを決意していった時期の日記。当時一葉は本郷菊坂町に住んでいた

